

# ASIAZ1

INSTITUTE  
OF  
CONTEMPORARY  
ASIAN  
STUDIES  
2006-11

ニュース・レター

2006



表紙PHOTO: イエメン首都サナアの旧市街  
(オールド・サナア、ユネスコ世界遺産)



DAITO BUNKA  
UNIVERSITY

国際関係学部・現代アジア研究所





## 共同の広場として

NORIAKI OSHIKAWA

国際関係学部長・現代アジア研究所長 押川 典昭

現代アジア研究所は、国際関係学部付置の研究所として、学部開設から4年後の1990年に設置されました。研究所の目的には、「現代アジアに関する学術研究およびこれに関する諸事業を行ない、研究成果を社会へ還元すること」とうたわれています。これまで、研究所の活動を社会へ発信するメディアとして発行されてきたのがニュースレターでした。とはいえ、研究者の世界はえてして狭いもので、社会へ発信するとはいっても、その受信範囲はごく限られていたのが実情です。

このたび、内容・体裁をリニューアルして発行することにしたのは、「社会」という曖昧な受信者ではなく、大東文化大学国際関係学部の学生、教職員、卒業生、そして保護者のみなさんをつなぐ共同の広場として、ニュースレターを活用したいと考えたからです。

いま、大東文化大学は、国際関係学部は、どんな様子なのか。学生と先生たちはどんな活動をしているのか。卒業生たちの近況は。まずはそんな身近なことを伝えるのがこのニュースレターの役目です。この創刊号には、国際関係学部のもっとも古い行事である「アジアミックス」の報告、イランと韓国への現地研修報告、在校生・卒業生

・留学生の近況報告などが並んでいます。

さらに、うれしい報告があります。国際関係学部がこの20年間取り組んできた教育が、2006年度の文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に選定されたことです。このプログラムは、文系・理系を問わず、さまざまな分野で教育を行なっている全国の大学から、特色ある優れた実践例を選定し、財政支援を行なうとともに、その事例を広く社会に情報提供することで、大学教育を活性化させようという趣旨で始められたものです。今年度は全国の大学・短期大学から331件の取組が申請し、国際関係学部の「アジア理解教育の総合的取組」を含めて、48件が採択になりました。すでに学内では、ポスターやリーフレットで今回の選定についてお知らせしていますが、ニュースレターの創刊号でそれを卒業生のみなさんにご報告できるのは大変うれしいことです。

これからもそんな元気の出るニュースを掲載していきたい。10頁の小さなものですが、多色刷りのこのニュースレターが、大東文化大学国際関係学部と縁のある人々の共同の広場となることを願っています。ご愛読くださいますようお願い申し上げます。

### CONTENTS

2	…ニュースレター再刊の記	共同の広場として	国際関係学部長・現代アジア研究所長	押川典昭
3	…学部の近況として	「天気晴朗なれども波高し」	国際関係学科主任	新納 豊
		「21年目の国際関係学部」	国際文化学科主任	田辺 清

### 4・5…アジアミックス

6	…2005年度現地研修報告	イラン	国際文化学科教授	原 隆一
7	…2005年度現地研修報告	韓国	国際文化学科講師	水野 さや

8	…留学生リポート	エジプト～アレキサンドリアより～	国際関係学科2年	木村 芙佐子
9	…留学生リポート	「割り勘」	国際関係学科2年	蘇 暁斐

10	…ヒンドウの神	国際関係学部	国際文化学科	91年度卒業	吉野 明美
	…現地に飛んで「体感」する	国際関係学部	国際関係学科	96年度卒業	田中 康夫
11	…意外性が導いたモノ	国際関係学部	国際文化学科	05年度卒業	丸山 瑞恵
	…テコンドーのこと	国際関係学部	国際文化学科	4年	新山 夏葵



## 学部の近況

### 「天気晴朗なれども波高し」

YUTAKA NIINO

国際関係学科主任 **新納 豊**



国際関係学部では2008年度から実施のカリキュラムを改定する作業をしており、7月にその「基本方針」が示されました。これは近年の大学をめぐる環境の変化に対応することを目指すもので、以下の4点にまとめられています。

- (1) 新入生に早く学部教育に適応してもらうための「導入教育」の徹底。
- (2) 各科目の役割分担と相互連携を明確にして学生が履修プランを組みやすくする。
- (3) 一般的な「学力低下」とは別に、「やる気格差(学力格差)」が拡大している。とりわけ学習意欲のある学生への対応を進める。
- (4) 各科目で授業の目的・到達目標を具体的に示し、それに基づく授業計画と評価基準を明確にすることで学生の学習目標をわかりやすくする。

ひとことで言えば、「学部の教育指針を学生が理解しやすいようにする」というあたり前のことになりますが、ねらいは科目の配置換えではなく授業内容の充実にあります。

さらに文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されたことで、新たに語学テキストや基礎教材の開発、地域連携(座学からフィールドへ)等も加わり、まさに「改革ラッシュ」になっています。これらに「大学全入時代」というトンネルを抜け出すためのラスト・チャンスとして取り組みますので、みなさんのご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

### 「21年目の国際関係学部」

KIYOSHI TANABE

国際文化学科主任 **田辺 清**



21世紀を迎えて6年、本学部も21年目に入った。学部創立当初から学部スタッフの多くが「21」という数字を意識して、1990年代早々にこの『ニューズレター』と共に冊子『ASIA 21』を創刊した。「21世紀を見据えて」という発想が、学部全体を支配していたのである。手塚治虫の近未来をテーマにした漫画で育った私の世代にとって、「21世紀」というのは生活のすべてが一変するような「夢」の日々に想えた。したがって学生たちにも、新しい世紀に向かって「夢」だけは捨てるなど言ってきたが、その気持ちだけは今も変わらない。

政治、経済、社会を学ぶ国際関係学科、文化、歴史、芸術の国際文化学科という区別はあるものの、両学科の境界は殆どなく、学生の気質も「関係学部生らしさ」という一言に集約される。ただ残念ながら、2000年代になるやいなや厳しい現実ばかりが学生たちを取り巻き、学生と教職員での暗中模索の毎日がつづいている。それでも、学部の理念を生かしたアジアを中心とした幅広い世界観を身につけるために海外へ飛び立ち、さまざまな資格を求めてダブルスクールに励む学生たちが年々増え、必死の様子がうかがえる。私たちも、「授業評価」等をとおして学生たちの声に耳を傾け、彼らの夢の実現に努力しなければならない。



# ASIA MIX 2006

楽しみながら  
アジアに対する  
関心・理解を高めよう

アジアミックスとは、大東文化大学国際関係学部地域研究学会主催によるイベントです。その目的は、国際関係学部の専攻である「アジア」をより多くの人たち(新生入や他学部の方、ひいては一般の方)に五感を通じて知ってもらうというものです。また、新生入たちにとっては、入学後初めてとなる「新生入生用」のイベントではない、全学を巻き込んだイベントであるということが特色として挙げられます。

また、アジアミックスの特色として挙げられることは学生による学生のためのイベントであるため、同じ環境で学び、過ごす学生と同じ視点に立って企画、進行ができるという点、また自由度の高さも挙げることが出来るといえるでしょう。この2点は、スタッフ、参加者共に楽しめるイベントということに集約されます。

さて、アジアミックスの目的は「アジアを五感で感じる」というものであり、そのために様々な工夫を毎年凝らしています。一日通じて行われる談話室でのアジア雑貨販売、アジア映画鑑賞、南アジアの伝統的なタトゥー、「メヘンディー」体験などに加え、昼休みに行われるプロの方を招いての民俗芸能鑑賞があります。これらはアジアミックス期間である3日間、手を変え品を変えて毎年企画を練ってどうすればよりよいリアクションをいただけるか考えています。

そして、アジアミックスの目玉とも言える17時からキャンパスプラザで始まる料理祭。これは1日3カ国、3日で国際関係学部が専攻する東アジア、東南アジア、南アジア、西アジア、合わせて9ヶ国(中国、韓国、タイ、ベトナム、インドネシア、インド、パキスタン、イラン、エジプト)の料理を振舞うという、普段中々触れられない嗅覚、味覚を通じてアジアに触れることができます。

このイベントは国際関係学部と共に成長をしているので、願わくばこれからも続いてほしいイベントの一つであると思います。



(総合プロデューサー 国際文化学科3年 竹ノ内 洋輔)





予定表

	キャンプラ企画 12:50~	エスニック料理祭 17:00~
13日	ガムラン演奏	インド・エジプト・タイ
14日	和太鼓・韓国打楽器・舞踊	コリア・イラン・ベトナム
15日	ベリーダンス	中国・インドネシア・パキスタン

13日~15日 アジア雑貨&古本販売 10:00~19:00(予定)

13日~15日 メヘンディー体験



コフタケバブ  
ファソリア  
シャーイ

エジプト  
班



イラン  
班

アダス・ポロウ  
ホレシエ・バーデンジャン  
ハルバ



コリア  
班

チチミ  
トツポギ  
ワカメスープ

グリーンカレー  
ガイ トートウ  
(タイ風フライドチキン)  
サイマン テッド

タイ  
班



ベトナム  
班

フォーボー  
ゴイ・クン  
ヴェトナムコーヒー



フォーボー

材料

鍋からスープ12カップ/牛しゃぶしゃぶ用肉800g/ニョクマム(またはナンプレー)大さじ2.5/コショウ少々/しょうゆ少々/乾燥フォー(もしくはタイ製クイツィオ)400gもやし100g/ライム2.5個/ミントの葉適量/サニレタス5枚/香葉の葉2.5カップ/万能ネギ2.5カップ/プリッキーヌ(または青唐辛子)25本/赤唐辛子)25本/赤唐辛子ペースト適量

作り方

- ①肉は熱湯にくぐらせておく。スープを一煮立させて、ニョクマム・コショウ・醤油で味付ける。
- ②フォーを水に10分浸けもどし、沸騰したお湯で1~2分ゆで、ざるにあげて水気を切る
- ③大皿に4等分に切ったライム・もやし・ミント・香葉・サニレタスを盛り付ける。プリッキーヌ・万能ネギはみじん切りにし、薬味として仕様する
- ④スープにフォーを入れ、いただく。③の具や薬味を自由にサーブし、味を調節する

からいっ!

パキスタン  
班

チャパテイ  
キーマカレー  
チャイ

インド  
班

キーマカレー  
ターメリックライス  
ラッシー

中国  
班

中華風おこわ  
小籠包  
フルーツ白玉

インドネシア  
班

ナシゴレン  
サテ  
クエ・ピサン

## アジア映画祭

開催場所  
談話室

- 1日目 13日
- 13:15~ ● 「アタックナンバーハーフ」 2006: タイ (104分)  
恋もバレーも、涙の数だけ強くなる♥  
監督: ヨンユット・トントコトーン  
出演: チャイチャーン・ニムプーサンワット
- 15:20~ ● 「おばあちゃんの家」 2002: 韓国 (87分)  
いつだって優しく見守ってくれた…  
監督: イ・ジョンヒヤン  
出演: キム・ウルブン
- 17:00~ ● 「頭文字D THE MOVIE」 2005: 香港 (109分)  
下り最速の伝説。  
監督: アンドリュー・ラウ  
出演: ジェイ・チョウ
- 
- 2日目 14日
- 13:30~ ● 「友達のうちはどこ?」 1987: イラン (83分)  
少年といっしょにハラハラドキドキ☆  
監督: アッバス・キアロスタミ  
出演: アハマト・アハマトプール
- 15:20~ ● 「私の頭の中の消しゴム」 2004: 韓国 (117分)  
あなたの記憶から絶対に消せない、永久不滅のラブストーリー  
監督: イ・ジェハン  
出演: チョウ・ウソン
- 
- 3日目 15日
- 13:30~ ● 「ムトゥ踊るマハラジャ」 インド (166分)  
ウルトラハッピー大娯楽映画。  
監督: K・S・ラビクマール  
出演: ラジニカーント

## 談話室企画・メヘンディー



インドや北アフリカ・中近東の  
地域で古くから伝わるボディペイント

## 談話室企画・アジア雑貨販売



かわいい  
雑貨が  
たくさん



ASIA MIX最終日。  
スタッフ全員が集まったの記念写真です。



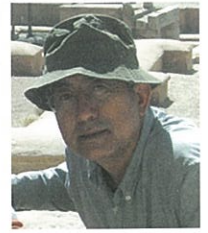



# イラン

国際文化学科教授

RYUICHI HARA

原 隆一



2005年度のイラン現地研修は9月22日から10月20日まで約1ヶ月、提携校であるシーラーズ大学を中心に実施された。シーラーズは由緒ある古都で、人口約150万のオアシス都市である。今回の現地研修は、教員で引率の原、学生に加藤賀那恵さん、三田晃子さん、五十嵐剛くん、村田俊介くんの合計5名からなる少人数の構成であった。

前半の約2週間は、シーラーズ大学のゲストハウスに泊まり、ペルシア語授業を中心に、市内見学と郊外遺跡ツアーを行った。午前中は大学でペルシア語授業、午後は市内にあるバーザール、モスク、庭園、博物館、サーディエやハーフェーディエなどの大詩人の廟を見学し、週末には、郊外にあるアケメネス朝やササン朝の古代遺跡であるペルセポリスやナクシェロスタム、フィルザーバードの拝火殿、遊牧民テントなどを訪ねた。

シーラーズを離れた後半の約2週間は、マイクロバスをチャーターして乾燥地域の沙漠とオアシスの自然、その中で培われた伝統文化や遺跡を訪ねる調査旅行であった。ササン朝の遺跡パサルガダ、隊商宿跡、ヤズドではゾロアスタ

一寺院や沈黙の塔、それに氷室、貯水槽、日干し煉瓦づくり、陶器作り、織機工房など沙漠の文化を見学した。その後、17世紀のサファヴィー朝時代に世界の半分と言われ、華やかなイスラム文化が華開いたエスファハンを訪ね、イマーム広場、バーザール、モスク、アルメニア教会などを見学し、夜はザーヤンデルド川にかかるシー・オー・セ橋の下のチャイハーネで、川風にあたりながら水パイプを堪能した。

エスファハンを出てからはイラン北部のカスピ海沿岸地方を旅した後、人口1000万人近くを擁する首都テヘランに戻った。絨毯博物館、考古学博物館、ガラス博物館、ローガットナーメ・ペルシア語学校、サアダーバード宮殿博物館などを見学した。テヘランでは、大学院に留学中で、国際関係学部の卒業生である坂本育子さんが我々を待っていてくれ、市内を案内してくれた。イスラム規制の厳しい環境のなかで、女性一人がよくがんばっていた。後輩たちには良い刺激になったようである。



シーラーズ大学校舎



授業風景



お別れパーティ




パサルガダ遺跡



ナクシェロスタム遺跡





# KOREA 韓国

国際文化学科講師

SAYA MIZUNO

水野 さや



2005年度は、男女合わせて47名という大所帯での現地研修となった。7月30日から8月19日までの21日間、ソウル市内にある高麗大学韓国語学文化教育センターで、韓国語はもちろん韓国そのものを学ぶプログラムである。

授業の初日は8月1日。入学式に続いてクラス分けテストがあり、さっそくクラスごとに授業が始まった。これから8月12日まで、基本的に朝9時から午後1時まで韓国語の授業を受ける。一方、教室での授業の後は、現代韓国そのもの、韓国文化を体験する時間であり、ナンタ観劇、サムルノリ実習、韓国式サウナ体験、高麗大学の学生との意見交換会などなど、盛りだくさんのスケジュールとなっていた。

なかでも、二日にわたって行われたサムルノリ実習は、まずパンソリを、続いて伝統民俗芸能で用いられる4種類の楽器を練習し、全員で歌い踊り演奏した。独特のリズム、節回し、こぶしの付け方に苦戦しながらも、太鼓や銅鑼を叩きながら教室中を歩き回った。そして、8日の板門店見学も、あらためて韓国の歴史を認識する絶好の機会であった。

また、13日から17日はグループごとに4泊5日の自由旅行に出かけた。これまでに会得した韓国語を実践するチャンスである。交通手段の確保、ホテルの予約からチケットの購入に至るまで、すべて自分たちで責任を持って行う。慶州、釜山、水原、江華島など、特別な観光地でなく移動中の車窓から見える風景さえも、まるごと韓国の一部なのである。

18日に行われた修了式では、これまでの学習成果をいかに、韓国語によるスピーチと歌の発表を行った。お世話になった先生方へのご挨拶も、もちろん、韓国語で感謝の意をお伝えした。滞在中のソウル市内はとにかく暑かったが、大きなケガや病気に罹ることはなく、19日、全員そろって帰国の途につくことができた。



板門店の軍事境界線上にある本会議場にて







## エジプト～アレキサンドリアより～

FUSAKO KIMURA

国際関係学科2年

木村 芙佐子



私は2006年9月から1年間、エジプトのアレキサンドリア大学に留学しました。アレキサンドリアはエジプト第二の都市で、地中海に面したその景観は首都のカイロとは大きく異なります。砂埃と喧騒のカイロと違い、ヨーロッパの面影が残る町並みと一面に広がる地中海、そしてそこに沈む夕日はほんとうに美しいものでした。

この留学で私が一番やりたかったことは、アラビア語の勉強とアラブの国に住んでイスラームを肌で感じることでした。大学で学んだことが、実際にどう彼らの生活と結びつき、どんな毎日を送っているのか、自分の目で見て知りたくてこの留学を決めました。

留学当初はゴミだらけの通りや、早朝から鳴り響くアザーンに驚いていましたが、徐々に慣れて気にならなくなりました。エジプト料理もスパイスが効いて美味しかったです。でも、日本との違いを一番感じたのは、イスラームの戒律に対してでした。全身をヴェールで覆った女性や、夏でも腕や足を絶対に見せない友達など、日ごろから宗教について考える習慣がない私にとって、常に宗教と生活が密接した暮らしは今までにない体験でした。

エジプトはうるさくて、日本人からすると物事がきちんと進まなくて、でもなんでか憎めない人が多くて、とにかく濃い時間が流れてる国です。街で喧嘩は平気です。外国人を見てからかったりもするけれど、その反面、たとえ初対面でも友だちのように話したり、道で困ってたら助けてくれたり、とにかく人とのコミュニケーションを心から楽しむ人達、それがエジプト人です。あまり感情を表に出さない日本人から見ると、それが時に過剰で戸惑ったり、スムーズに進まなくていらいらしたりすることはありますが、物事を固く考えないでユーモアを交えて話してくれる彼らとなると、笑いが絶えませんでした。

留学で一番思い出に残っているのは、「ラマダン」です。ラマダンは断食月といい、イスラーム教徒が1ヶ月の間日の出から日没まで一切の飲食を断ち、イスラーム教徒全体の連帯感を高めるとともに、神への感謝と自己の鍛錬の期間とされています。この時期、彼らはとにかく信仰深くなり、日中はひっそりと静寂の時間が訪れます。そして、日没と同時に家族全員がそろってにぎやかな食事が始まり、街には電飾が灯り、食事の後のお祈りを終えた人々は夜中まで団欒を楽しみます。そして再び、夜明けと共に禁欲の生活へと戻っていきます。この昼と夜の対比が本当に色鮮やかで、とても印象深いものでした。断食はつらいけれど、彼らはそれを生活の一部としてこなし、たくさんの親戚や友人に会えるこの時期を、とても楽しみにしていました。

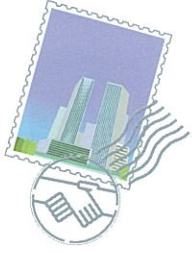
この留学で得たものは、書ききれないほどたくさんあります。悔しかったこと、悲しかったこと、嬉しかったこと、楽しかったこと、全部忘れないでいたいと思います。留学中に書いた日記と撮った膨大な数の写真は、私の一番のお土産です。エジプトでのたくさんの出会いに心から感謝して、これからこの経験をいかしていきたいと思っています。



アレキサンドリアのモスク

上・留学修了式のあとで  
下・ラマダン日没後の食事





## 「割り勘」

国際関係学科2年

SO GYOBUN

蘇・暁雯



5年前、私は日本語を勉強するために上海から東京にきた。東京に着いて、日本の土地を踏み始めたとき“日本は素晴らしい”とか“日本は上海よりいい”とかを全然感じてなかった。なぜなら、上海に行ったことがある日本人に聞いてみればわかると思うが、上海はもう一つの新宿からだ。人が多いし、ビルの数も数え切れないほどある。日本料理も上海ではいくつかの店がある。だから、日本は私にとって、もう一つの上海である。

日本で生活を始めて、日本人の生活習慣をどんどんわかってきた。日本人の中では“割り勘”という習慣がある。

“割り勘”というのは、みんなが買ったものを人数分で割って、一人ずつ同じ金額をだすことで、飲食店やスーパーでよく見かける光景である。これは、親しくない人々の間ではなく、親しい友人でこの現象がある。もっと理解できないのは、この習慣は家族の中にもあるそうだ。私は5年間日本に住み続けてきたから、だんだんこういう習慣に慣れてきた。でも、日本にいる1年目は本当に疑問をもって、友だちを作っていた。なぜ日本人はおごったりとかをしないの？なぜやさしい日本人の中にこういう冷たい面があるのって、ずっと考えていた。中国では、物とかご飯とかをおごったり、ごち

そうしたりするのは普通である。友だちだから物をあげるのは当たり前のこと、そうすれば友情をもっと深めることができると思われている。だから、中国人はいろんな理由をつけて、多人数で外食をすることが多い。もし10人いれば、その中の1人が必ず食費を全額出すことになる。おごられた人は次回におごるか、プレゼントをするかだけである。その場でお金を計算してから食費を出すことは、まずない。皆で楽しく食事することが第一であり、もし別々に払うと、これはもう友達ではないと考えてもいい。中国では、自分が飲んだ分、食べた分の料金を支払うのは、自分一人のときだけ。

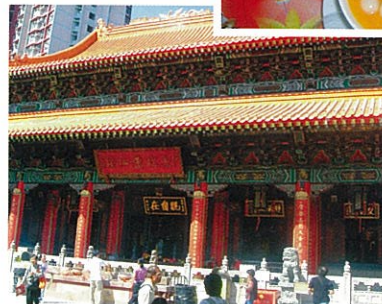
もちろん、それぞれの国の文化によって、人々の交際する方法も違う。“割り勘”はいつから日本で生まれたのかわからないけど、今の日本人の中では、割り勘をしなければいけないという意識を強くもっている。客観的にみれば金銭トラブルを起こさないのはいいいことかもしれない。日本は物価が高いから、一人当たりの生活費も高くなる。自分でアルバイトをして、稼いだお金を大切に計画的に使うべきであり、人に物とかご飯とかを奢る余裕はないと思う。これも割り勘が日本で流行るもう一つの原因だと思われる。



会食風景



中国のスイーツ



中国のお寺



## ヒンドウの神

国際関係学部 国際文化学科 91年度卒業 吉澤 明美

今回のお話を頂いた際に、真っ先に現地研修のインドで出会った母子の顔が浮かびました。

インド、それは神と貧困と汚濁の共存する場所。それが私の心に直接飛び込んできた印象でした。バスのウィンドウ越しに目の当たりにした物乞いの母親と、そのやせ細った腕にしがみつくように抱かれる乳飲み子のギョロリとした眼差し。いつかわが子を授かる日が来たら、自分たちが生を受けた環境がいかに恵まれているのかという事を伝えて行かねばならないと誓い15年の年月が流れましたが、あの時の母子の姿は色あせることなく今も脳裏に焼きついています。私達の暮らす日本は衣・食・住に困ることなく、そして自分が望む場所で働く事ができるといふ幸せにはほんの少しでも感謝の念を抱く事ができたらニートやいじめ、犯罪などもこれ程までに増殖することはなかったのではないのでしょうか。

怠けそうになった時、驕りそうになった時、人生に迷った時、

大切な宝物と一緒に…



インド現地研修にて

ありとあらゆる場面であの母子が脳裏に現れます。私にとってはまさしくあの母子が神の化身なのです。生きて行く上でそれぞれの人にそれぞれの神が必要です。私には二人の子がいますが、その子供達もいつの日か「自分にとっての神」に出会えることを楽しみに成長を見守っております。



イラスト:柴崎泰子さん  
(中央写真前列右下2番目)

## 現地に飛んで「体感」する

国際関係学部 国際関係学科 96年度卒業 田中 康雄

「1ヶ月間、インドネシアに私を派遣してください。」

約10年前、入社間もない自分が、上司にそのようなことを言えたのも、大学時代のパークスターン短期留学の経験から、現地に足を運ぶ重要性を痛感していたからだ。

現地に入ると、気候、街並み、人々の表情、服装、食べ物、音楽、におい、すべてが迫ってきて、それらを五感で体感することで、その国の人々の考え方の背景や嗜好を感覚的にも理解することができる。

工具・レーザー機器メーカーに就職後、最初の仕事はインドネシアでの輸入代理店探しであった。ジェットロ等に登録されている企業リストから候補を探して、レターのやり取りだけで済ませてしまうという方法もあったが、あえて1ヶ月間現地に張り込んで、徹底的に市場を「体感」した。猛暑の中、流通構造、競合状況、価格の相場感を掴むために何十店も

の小売店を通訳と2人で連日回訪して情報収集に努めた。この期間中、たわい無い雑談から現地の事業展開のヒントを得たことは1つや2つではない。

この結果、最終的には、流通の「川下」から遡って、力のある、現地で信頼のある優秀な輸入会社を探し出し、総代理店契約を結ぶことができた。

この話は、結局、直後にアジア通貨危機(97年7月)に見舞われ、市場が壊滅的な打撃を受けた為、水泡に帰してしまっただが、この時の経験、培った手法は貴重な宝となり、その後のデトロイト、シンガポール、モスクワ等での駐在・事業立ち上げの際の基礎となっている。

4月から新たに上海駐在生活が始まり、今の私は、中国を、上海を、そこにいる人々を、全力で「体感」中である。



上海の夜景



## 意外性が導いたモノ

国際関係学部 国際文化学科 05年度卒業 丸山 瑞恵

漢民族が9割を占める中国へ赴いたのは一年前、イスラーム教徒(ムスリム)が推定2千万人(主に回族・ウイグル族)、モスクが4万座という、意外性に興味を持ち、その実態を調べるべく、10地域程訪問し、中国モスクの建築様式を中心に調査を試みた。北京や西安では、漢民族との摩擦を避ける為に、中近東など、イスラーム諸国のモスクを想わせるドームやミナレットはなく、瓦屋根や鐘楼を用いた中国スタイルのモスクが目を引く。一方、西へと針路を進めれば、色鮮やかに装飾されたドームが点在しているばかりか、街の風景も変わり、闊沓深く、顔立ちがはっきりしたウイグル族の世界に浸ることができる。

中国のモスクにはどんなアラビア語の文句が、どこにどうやって書かれているのか。モスクに民族性・地域性としての共通点はあるのだろうか。モスクにはどんな文化・歴史的背景が隠れているのかなどの切り口から模索し、検討を加えた。

イスラームの始まりは、タラス河畔の戦いの時、或いは、シルクロードの東西交流に因るとも言われているが、現在までこの漢民族社会の波に呑み込まれずに、モスクを中心とした生活に生きるムスリムに、力強さや逞しさを覚えた。そして、「スィーニー書体」として、アラビア語書道を中国独自の書体として発展させた、中国イスラーム文化は、現在では東南アジアで大きく評価されている。

中国において生活共同体の中心に位置付けられるモスクは、中国「ムスリム」であることの象徴の表れのような。文化大革命などで崩壊に追いやられたモスクが、ミナレットを配し、ドームを戴くモスクへと姿を変え始めている。



甘粛省・蘭州市にある橋門清真寺(モスク)の礼拝室  
中国様式の礼拝室の屋根には、色鮮やかなドームが載る

私にとっての「意外性」とは、単に知識不足という事かもしれない。その無知であるが故に、知る事が刺激的で、感動的であり、何もかも面白く映った。意外性が運んできた追求する面白さは、結果、受賞を齎してくれた。そして、その後もモスク巡りをする楽しさをも与えてくれた。

今、目の前に建ちはだかる巨大なピラミッドを見ながら、小さな旅行会社のデスクにいる。加えて、エジプト人に日本語ガイドの家庭教師をする日々は、悠々の時が流れる、エジプトのイメージとは間逆の多忙な生活にある。そして、家のベランダから眺める遠くのピラミッドに何かしらの想いを馳せる。一ヶ月間続く、断食月の日没直後、賑やかだったカイロの街は一変して静けさを齎す。一日にして、幾色の顔を見せるカイロの街は、飽きることはなく、退屈さえも感じさせない。

こうして今エジプトにいるのも、多くのきっかけを与えてくれた大学での4年間なしには考えられなかったかもしれない。

最後に、この論文の完成・受賞に至っては、熱心に指導して下さいました先生方、並びに大勢の友人たちのご協力のお陰である。あらためて、お礼を申し上げます。

卒論タイトル「中国の清真寺—34座のフィールドワークを基に」(2005年度卒論学部長賞受賞者)

## テコンドーのこと

国際関係学部 国際文化学科 4年 新山 夏葵

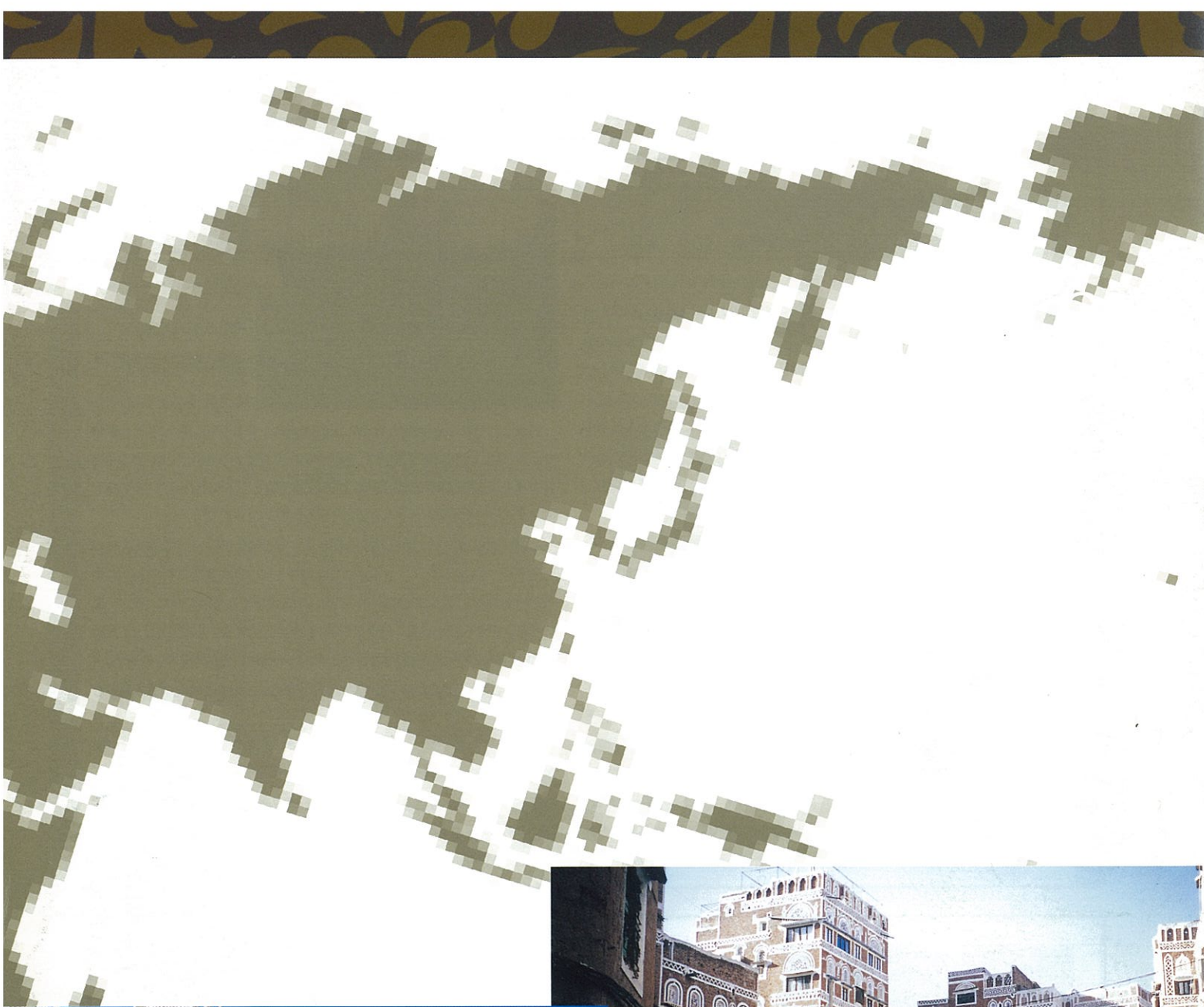
2006年4月と5月、私は多くの皆様に応援していただき、テコンドー日本代表として、二大会に出場させていただくことが出来たが、実は最初はアメフトのマネージャーか、落研に入部しようと思っていた。大学一年の春、テコンドーがなんたるかを知らず、部活勧誘に誘われるまま見学に行き、断ることが出来ず、辞めたいと言いつつも四年間続けてきた。格闘技は見たことがなく、全くの無知で育ってきたのだ、家族はどれほど驚いたことだろう。

知らない世界で全く勝てず、辞めたいという鬱憤は日に日に溜まり、日々の練習がただの時間つぶしようになっていたころ、日本代表を務めたことのある先輩に「やめたいと思ったこと？いくらでもあるよ」と言われた。弱い気持ちに陥るのは何も自分だけでなく、トップの人たちですら必ず起こりうるものであることを知った。辞めたいという気持ちは、時に自分の奥底の向上心を打ち消そうとする。

三年の春初めての一勝を果たす。一から急に十には行けない、一の次は二、二の次は三、そうしてようやく十になる、という監督の教えと、先輩の言葉を胸に四年間続けてきた。柔道家の嘉納治五郎は「人生には何事もナニクソと思う気持ちが大切だ」と語った。とにかく目の前の一つ一つを乗り越え続けたいと思う。







裏表紙PHOTO: イエメン首都サナアの旧市街  
(オールド・サナア、ユネスコ世界遺産)



INSTITUTE  
OF  
CONTEMPORARY  
ASIAN  
STUDIES  
2006-11

ASIA 21 ニュース・レター 2006  
2006年11月

編集人: 大東文化大学国際関係学部 現代アジア研究所広報出版部会  
発行人: 押川 典昭  
発行所: 大東文化大学国際関係学部 現代アジア研究所広報出版部会

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560  
TEL.0493-31-1523 FAX.0493-31-1524

編集・制作・印刷: 大屋印刷株式会社